組版マクロ for Word Ver.1.1
ユーザーズマニュアル

1 組版マクロ　インストール／アンインストール方法

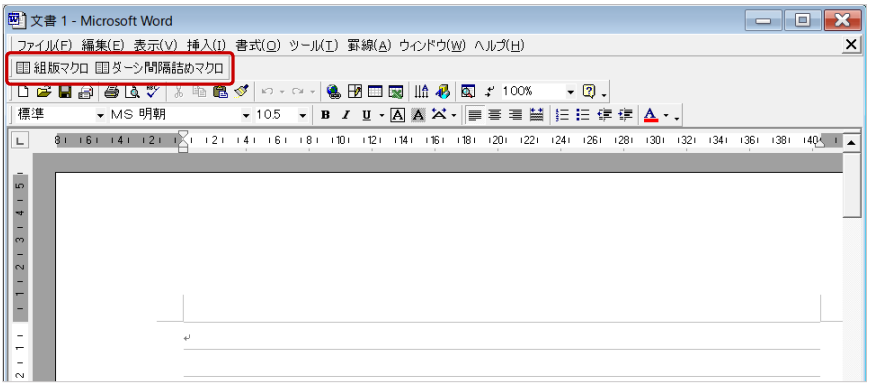
1.1 Word 2000～2007でのインストール

1 Word 2000～2003の場合は、「ツール(T)→マクロ(M)→セキュリティ(S)」の「セキュリティレベル」タブで、レベルを「低(L)」に変更します。Word 2007の場合は、Officeボタン→「Wordのオプション(I)」から「セキュリティセンター」に入り、以降は次ページ1.2.1の手順に従って「マクロの設定」で「すべてのマクロを有効にする(中略)(E)」にチェックを入れ、Wordを一旦終了させます。

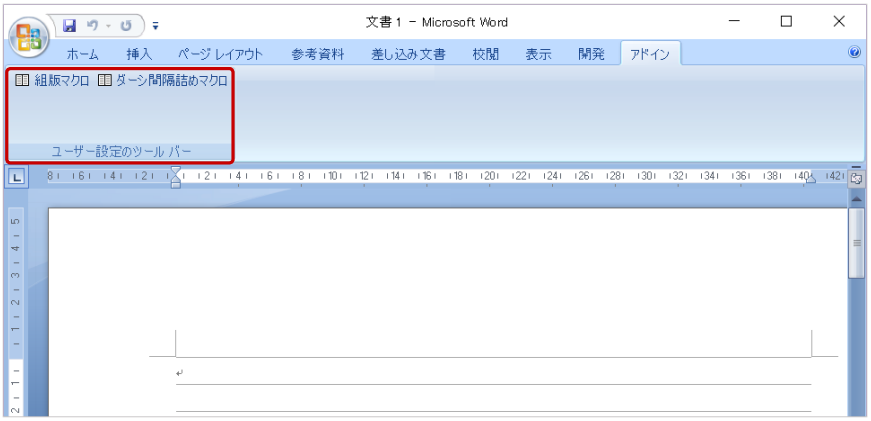
2 「組版マクロ.dot」を下記のフォルダにコピーします(「.dotm」は使用しません)。

- Windows XPの場合
  C:\Documents and Settings\(ユーザー名)\Application Data\Microsoft\Word\STARTUP
- Windows Vista/7/8/8.1/10の場合
  C:\Users\(ユーザー名)\AppData\Roaming\Microsoft\Word\STARTUP

3 Wordを起動すると、Word 2000～2003ではツールバーに、Word 2007ではリボンの「アドイン」タブに、「組版マクロ」と「ダーシ間隔詰めマクロ」のボタンが追加され、マクロが使用可能となります。



Word 2000～2003では、ツールバーにボタンが組み込まれます。



Word 2007ではリボンの「アドイン」タブにボタンが組み込まれます。

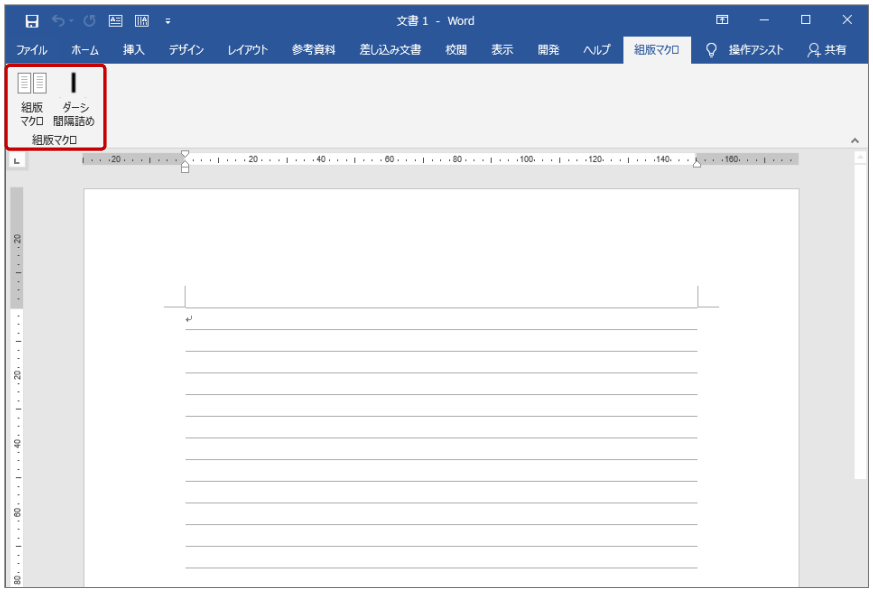
1.2　Word 2010以降でのインストール

1 「ファイル→オプション」で「Word のオプション」ダイアログを表示させ、左側のメニューから「セキュリティ センター」を選んで、「セキュリティ センターの設定（T）」ボタンをクリックします。次に「マクロの設定」で「すべてのマクロを有効にする～（中略）～（E）」にチェックを入れ、Word を一旦終了させます。

2 「組版マクロ.dotm」を下記のフォルダにコピーします（「.dot」は使用しません）。

- Windows XP の場合
  C:\Documents and Settings\（ユーザー名）\Application Data\Microsoft\Word\STARTUP
- Windows Vista/7/8/8.1/10 の場合
  C:\Users\（ユーザー名）\AppData\Roaming\Microsoft\Word\STARTUP

3 Word を起動すると、リボンに「組版マクロ」タブが組み込まれ、「組版マクロ」と「ダーシ間隔詰めマクロ」のボタンが表示されます。以後、編集を行う全文書で、「組版マクロ」「ダーシ間隔詰めマクロ」が使用可能となります。



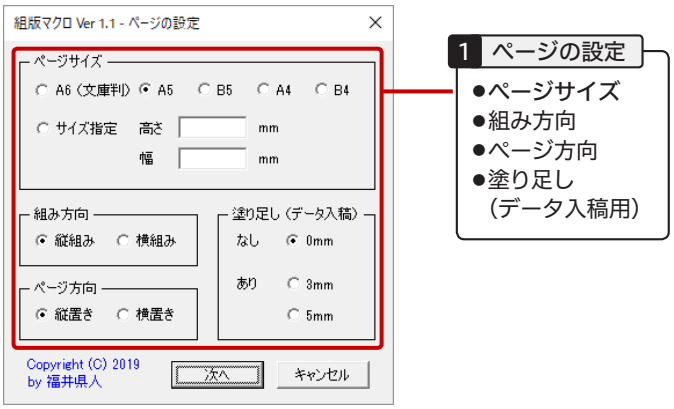
Word 2010以降では、「組版マクロ」タブにボタンが組み込まれます（上の例はWord 2016です）。

2 組版マクロ　使用方法

2.1 基本的な使い方

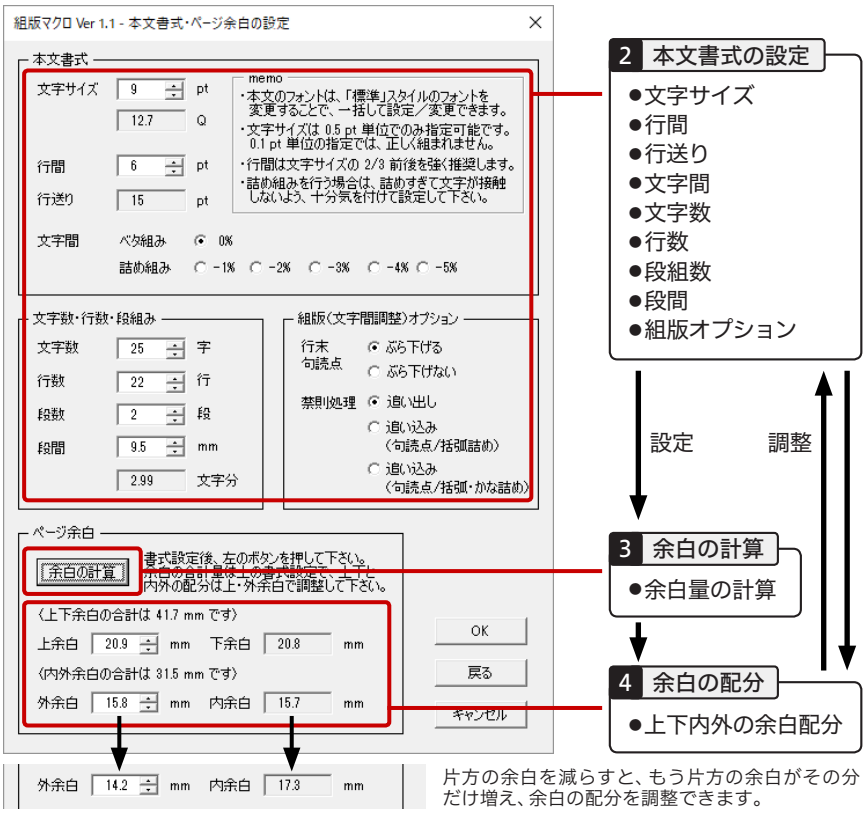
1 組版を行いたい文書を開き、ツールバー・タブ等から「組版マクロ」を実行します。

2 「ページの設定」ダイアログが開きますので、ページサイズ・組み方向・ページ方向・塗り足しを設定します（内容の詳細については 2.2 参照）。



3 「本文書式・ページ余白の設定」ダイアログで、本文の文字サイズ・行間・文字間・字数・行数・段数・段間・組版オプションを設定します（詳細は 2.3 を参照下さい）。

4 本文の書式を設定した後、「ページ余白」の「余白の計算」ボタンを押して、余白を計算します。一度余白の計算を行った後は、書式を変えるとそれに応じて余白が自動計算されます。余白がマイナスになったり狭すぎたりした場合は、行数・字数を減らすなど本文書式を変更して、余白を確保します。広すぎた場合は、その逆の調整を行います。デフォルトでは上下・内外の余白がそれぞれ均等になるよう計算されますが、上下・内外の余白の配分も変更できます。

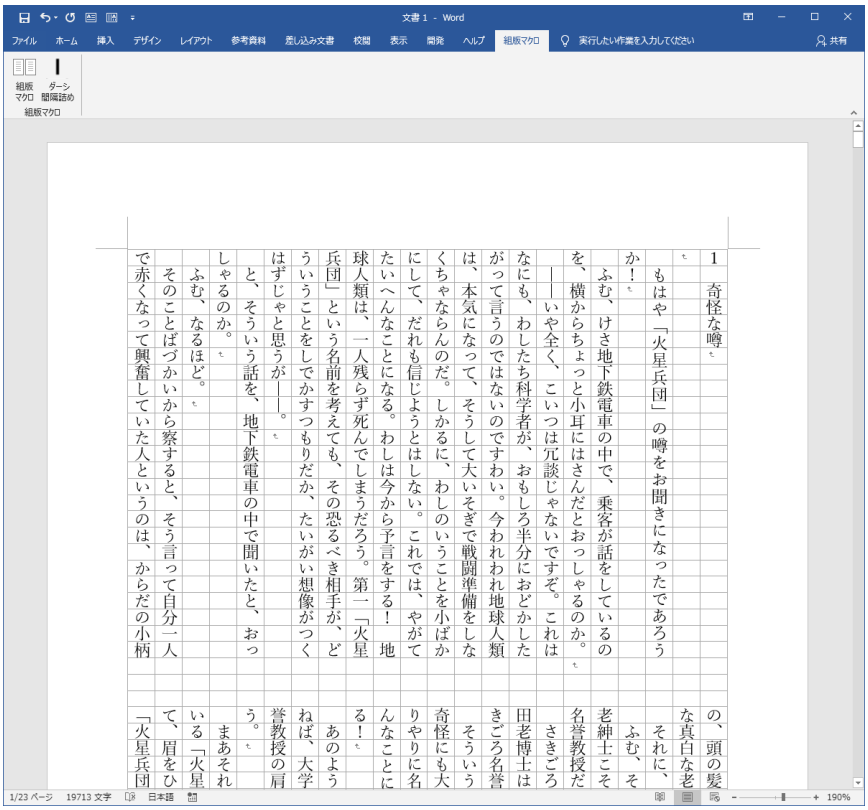


片方の余白を減らすと、もう片方の余白がその分だけ増え、余白の配分を調整できます。

memo

「本文書式・ページ余白の設定」では、「戻る」ボタンでいつでも「ページサイズの設定」に戻れます。どちらの設定画面でも、マクロを強制終了したい場合は、「キャンセル」ボタンを押して下さい。

5 全ての設定を終えると、ページ設定・書式設定が実行されます。設定した文字送り・行送りの間隔で、自動的にグリッド線が引かれますので、テキストを流してみて、文字数・行数・文字間・行間等がおかしくないか確認します。もしテキストが指定通りに収まっていない場合は、余白を 0.1 ㎜単位で微調整するか、マクロを再度実行して設定を一部変更します。



2.2　ページサイズの設定

●ページサイズ

作成するページのサイズを選択します。任意の用紙サイズも指定可能です。

●組み方向

縦組み（縦書き）・横組み（横書き）が選択できます。

●ページ方向

縦置き・横置きが選択できます。

●塗り足し（データ入稿）

ページの端まで文字・線・塗り・画像などを入れる場合、Word では仕上がりサイズの外側に塗り足し（裁ち落とし）領域を作って、これらをそこまではみ出させて配置する必要があります。

同人誌印刷所へのデータ入稿では、通例 3㎜または 5㎜の塗り足しを設けるように、つまりページサイズを縦横各 6㎜または 10㎜大きく作成するように指定されます。塗り足しとして「あり」の「3㎜」または「5㎜」を選択すると、選択／設定したページサイズに、各辺 6㎜または 10㎜を足してページを作成します。

memo

グリッド線が邪魔な場合は、「表示」タブなどからグリッドの表示をオフにできますが、マクロを再実行すると再度グリッド線が表示されます。
なお、一番下または右のグリッド線（特に下）が表示されない場合がありますが、設定自体は正しく行われています。

Note ■処理の取り消し

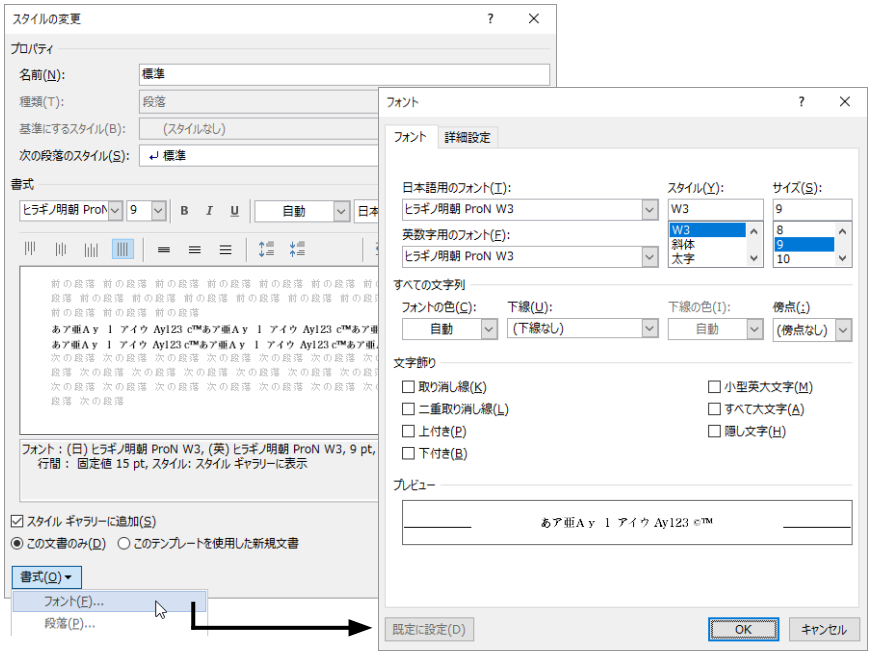
　このマクロは、複数の設定変更を一気に実行します。そのため、前の状態に戻すには複数回のアンドゥが必要です。再度マクロを実行し、書式を設定し直す方が確実です。（マクロによる設定変更内容については、2.4をご参照下さい。）

2.3　本文書式・ページ余白の設定

●フォント

　このマクロでは、フォントを直接指定することはできません。Word のマクロでは、Windows にインストールされているフォントの一覧を直接取得することができないためです。

　本文のフォントを変更したい場合は、本文を選択してフォントを設定するのではなく、「標準」スタイルのフォントとしてそのフォントを指定して下さい。これは他の書式の変更についても同様です。テキストを選択して直接フォント・文字サイズ等の書式を変更してしまうと、以後その部分のその書式については、「標準」スタイルの変更や組版マクロによる変更が反映されなくなります。



●文字サイズ

　本文の文字サイズを、pt（ポイント）単位で設定します。0.5pt 単位での指定のみ有効です。文字サイズを設定すると、その下に Q（級数）への換算値が表示されます。直接 Q 単位で文字サイズを指定することはできません。

●行間

　行間をポイント単位で設定します。文字サイズ・行間を設定すると、その下に行送り（＝文字サイズ＋行間）が表示されます。

　読みやすさという点から、本文の行間は本文の文字サイズの 2/3 前後に設定することを、強く推奨します。特にルビ（ふりがな）を入れる場合は、広めに取る必要があります。ルビの文字サイズは本文の 1/2 であるため、これより行間がある程度大きくないと、ルビが前の行に接近しすぎてしまいます。

　なお、Word での行間・行送りの考え方は次ページ左の図の通りです。行送り幅（横組みでは高さ）の中央に行が配置され、文字の前後には（行間× 1/2）分のスペースが入ります。この点には注意が必要で、縦組みでは「本文領域の横幅＝行送りの整数倍」に合わせないと、次ページ右の図のように奇数／偶数ページで外余白や内余白が同じにならず、ページの裏表で行位置がズレます。本マクロでは、本文領域の幅（横組みでは高さ）を正確に（行送り×行数）分に設定して、そのようなズレが出ないようにしています。

Note■プロポーショナルフォント

「MSP明朝／ゴシック」「IPA P明朝」などでは、ひらがな・カタカナ・括弧／記号の詰め幅が文字の形に応じて変わり、より大きくかつ文字間が均等に見えるよう詰められます。

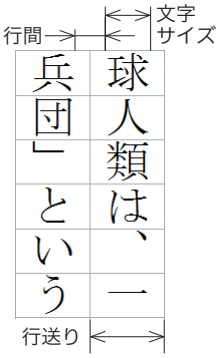
　このような詰め方を「字面詰め（プロポーショナル詰め）」と呼び、最初から文字間がそのような設定になっている日本語フォントを「（和文）プロポーショナルフォント」と呼びます。これらは横組みでの使用を想定しており、縦組みには向きません。

■固定ピッチフォント
文字間がプロポーショナル

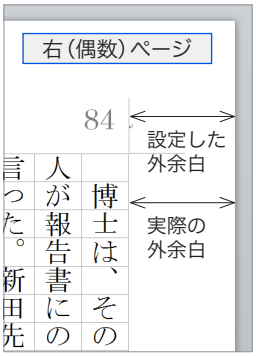
■プロポーショナルフォント
文字間がプロポーショナル

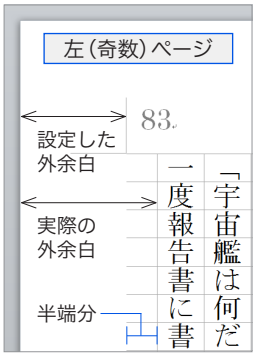
memo

文字サイズを0.1 pt単位で入力すること自体は可能ですが、Word内では小数点以下が切り捨てられて処理されるため、設定した通りにはなりません。



Word での「行間」「行送り」は、上図の部分を指しています。





縦組みでは「本文領域の横幅＝行送りの整数倍」に合わせないと、上図のようにページの裏表で外側（および内側）の実余白が同じにならず、本文の行位置がズレてしまいます。

「火星兵団」について、一生けんめいしゃべっていた蟻田博士の放送が、なぜその時、ぷつんと聞えなくなったのであろうか。それは、放送局が停電したわけでもなく、また機械が故障になったわけでもない。放送の監督をしている逓信局が、博士の放送がおだやかでないのに驚いて、がちゃんとスイッチを切ったのであ

文字サイズ：9.0pt
文字間：0%（ベタ組み）
行間：4.5pt（1/2文字分）

「火星兵団」について、一生けんめいしゃべっていた蟻田博士の放送が、なぜその時、ぷつんと聞えなくなったのであろうか。それは、放送局が停電したわけでもなく、また機械が故障になったわけでもない。放送の監督をしている逓信局が、博士の放送がおだやかでないのに驚いて、がちゃんとスイッチを切ったのであ

文字サイズ：9.0pt
文字間：0%（ベタ組み）
行間：6.0pt（2/3文字分）

「火星兵団」について、一生けんめいしゃべっていた蟻田博士の放送が、なぜその時、ぷつんと聞えなくなったのであろうか。それは、放送局が停電したわけでもなく、また機械が故障になったわけでもない。放送の監督をしている逓信局が、博士の放送がおだやかでないのに驚いて、がちゃんとスイッチを切ったのであ

文字サイズ：9.0pt
文字間：0%（ベタ組み）
行間：7.5pt（5/6文字分）

※例はInDesignで組んだものです。　※フォントは全て「ヒラギノ明朝 ProN W3」です。

●文字間

全角の文字は、下図のように正方形のマス目の中に収まるようデザインされており、行間も文字間もこのマス目の間隔を示しています。

本マクロでは文字間の設定として、文字を隙間無く並べる「ベタ組み」と、均等に詰めて並べる「詰め組み（均等詰め）」が選択できます。文字間は文字サイズの何％かで示されます。文字間をベタ組みより広げていくと、間延びして行のラインがぼやけてしまうため、本文の組み方としては推奨できません。本マクロでも、ベタ組みより空ける組み方は設定できないようにしています。

■ベタ組み

■詰め組み（均等詰め）

全角文字は正方形のマス目（仮想ボディ）の中に収まるようデザインされ、行間も文字間もこのマス目の間隔を示します。文字をマス目通りに隙間無く並べるのがベタ組み、一定量だけ均等に詰めて並べるのが詰め組み（均等詰め）です。

memo

フォント（のデザイン）によっても、行間・文字間の空き具合はかなり違って見えます。必ず、実際に使用するフォントで文字組みを調整して下さい。

Tips Wordのベタ組み機能①

Word には、一応本文をベタ組みに設定できる機能があります。

横組みで段組を組まない場合、ページ設定で「文字数と行数を指定する(H)」を指定し、「字送り(I)」で「標準の字送りを使用する(A)」にチェックを入れて字数を指定すると、字送り＝本文の文字サイズとして、ベタ組みとなるよう右余白を自動調整してくれます。

ただ、縦組みでは何故か下余白だけでなく右余白まで勝手に変わってしまい（下余白と同じ値になる）、使いづらい機能になっています。

1）ベタ組み

「ベタ組み」は「文字間＝文字サイズの 0%」となる組み方です。どのフォントもベタ組みを基本に設計されており、小説など書籍の本文ではベタ組みが標準的な組み方となります。文字間が 0% と言っても、文字が入る正方形の周囲、文字と文字の間には少しスペースがあり、文字が接触することはありません。

2）詰め組み

「詰め組み」は、文字送りをベタ組みより狭くする組み方です。このマクロでは、全ての文字に対して均等に文字を詰めます（均等詰め）。詰め量は文字サイズの 1 ～ 5%（画面上では－1 ～－5%）から選択できます。

詰め組みには文章の入るスペースを節約できる、行のラインをハッキリ見せられるといった効果があり、雑誌ではよく見られる組み方です。但し、詰め過ぎると読みにくくなり、文字と文字が接触してしまうことがあります。字形（特にひらがな・カタカナ）の縦横比の関係から、縦組みは横組みより文字間に余裕がないため、詰め幅を横組みより抑える必要があります。

「火星兵団」について、一生けんめいしゃべっていた蟻田博士の放送が、なぜその時、ぷつんと聞えなくなったのであろうか。それは、放送局が停電したわけでもなく、また機械が故障になったわけでもない。放送の監督をしている逓信局が、博士の放送がおだやかでないのに驚いて、がちゃんとスイッチを切ったのであ

文字サイズ：9.0pt
文字間：+5%
行間：6.0pt（2/3文字分）

「火星兵団」について、一生けんめいしゃべっていた蟻田博士の放送が、なぜその時、ぷつんと聞えなくなったのであろうか。それは、放送局が停電したわけでもなく、また機械が故障になったわけでもない。放送の監督をしている逓信局が、博士の放送がおだやかでないのに驚いて、がちゃんとスイッチを切ったのであ

文字サイズ：9.0pt
文字間：0%（ベタ組み）
行間：6.0pt（2/3文字分）

「火星兵団」について、一生けんめいしゃべっていた蟻田博士の放送が、なぜその時、ぷつんと聞えなくなったのであろうか。それは、放送局が停電したわけでもなく、また機械が故障になったわけでもない。放送の監督をしている逓信局が、博士の放送がおだやかでないのに驚いて、がちゃんとスイッチを切ったのであ

文字サイズ：9.0pt
文字間：−5%（均等詰め）
行間：6.0pt（2/3文字分）

※例はInDesignで組んだものです。　※フォントは全て「ヒラギノ明朝 ProN W3」です。

●文字数

1 行の文字数を指定します。

●行数

1 ページに入る行数を指定します。

●段数

段組の段数を指定します。段組を組まない場合は、「1」と入力します。

●段間

段組を組む際に、段の間隔を㎜単位で指定します。段組を組まず段数を「1」とした場合、段間は自動的に「0 ㎜」に設定されます。

memo

Wordの仕様により、行長（段の幅）を12.7㎜（1/2インチ＝36pt）以下に設定することはできません。また、ページ縦置きで縦組みとした場合、「余白合計≧ページ横幅」に設定することができません。こちらは、縦組みへの対応が甘い部分と言えます。

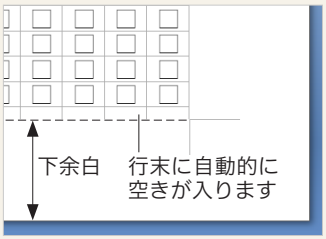
memo

Wordでは文字送り量が0.05pt単位でしか設定できないため、詰め量が設定値から僅かにズレます。
例えば、文字サイズ 9ptで3%詰めに設定した場合、本来の文字送り量は8.73pt（詰め量0.27pt）ですが、実際の文字送り量は8.75pt（詰め量0.25pt＝2.7%詰め）となります。

Tips Wordのベタ組み機能②

Word 2010までなら、行長をある程度ベタ組みに近いところまで追い込み、「字送り（I）」に本文文字サイズを入れて所定の字数を指定すれば、ベタ組みにできます。行長を正確に合わせなくても、字送りが設定通りになるよう、下図のように行末に半端分の空きが自動的に挿入されるからです。段組を組む場合も、段幅を文字数の整数倍に合わせ、半端分を段間で吸収すれば、やはりベタ組みにできます。

但し、手動で余白や字数などの設定を変更すると、行末の空きが消えて、通常の両端揃えとなる場合があります。また、Word 2013からは行末の空きが入らなくなり、強制的に両端揃えにされるため、この方法ではベタ組みにできなくなりました。



memo

段間はスピンボタンでは0.5㎜単位で変わりますが、入力自体は0.1㎜単位でも0.01㎜単位でも可能です。

memo

段組時は行長（文字間）を正しく設定することを優先し、計算誤差として出て来る半端分を段間で吸収させています。そのため、段間は設定値より僅かに広くor狭くなることがあります。

段間を入力すると、段間が本文文字サイズの何文字分に相当するか下に表示されます。設定の参考として下さい。直接文字数で段間を設定することはできません。段間は行長が長いほど余裕を持たせ、最低でも本文２～３文字分は空けます。

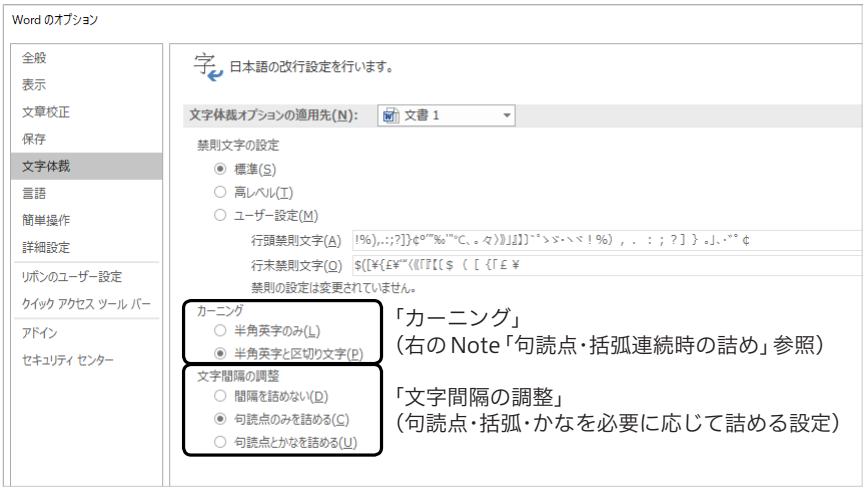
●行末句読点（ぶら下げ）

行末に句読点が来る場合に、句読点をぶら下げるか、ぶら下げないかを指定します。ぶら下げを行うようにすると、文字間の調整（次項参照）の頻度を減らすことができ、文字をより一定間隔で並べることができます。但し、段組の段間が狭い場合は、句読点が段間にはみ出すことにより、段間が狭いという印象を与えてしまいます。

●禁則処理

日本語の文章を組む場合は、行頭と行末で文字の位置を揃える「ジャスティフィケーション」を行います。（Word では段落設定の「配置（G）」をデフォルト通り「両端揃え」にすれば、そう組まれます。）　一方で、文字の並べ方には禁則処理など様々な約束事（組版ルール）があり、これに従おうとすると行内に収める文字が微妙に増減します。その場合は、文字間を少し詰めたり広げたりして行に収め、場合によっては前後の行も含めて文字を配置し直す、という処理を行います。

こうした場合、日本語組版ではまず元々空きがある句読点・括弧類などの前後を少し詰めて追い込み、それで収まらない場合は行内の全体の文字間を広げて、余分な文字を次行に追い出します。句読点・括弧類以外の文字の間隔も詰めて追い込む方法もあります。実際の文字組みは、「どの文字の前後をどこまで詰めることを許すか」で決まり、Word では「オプション」にある「文字間隔の調整」がその設定になります。本マクロでも、これを変更できます。



１）追い出し

「文字間隔の調整」が「間隔を詰めない（D）」に設定されます。行長が足りない場合も、行中の句読点・括弧の前後の空きやかなの文字間は一切詰めません。従って、禁則処理が入る場合は、対象文字を次の行に追い出す、即ち文字間を広げて、その行内の字数を減らす処理が基本となります。そのため、１行文字数が少なめで文字間が設定より広がる行が、他の設定より多くなります。

行末の句読点／括弧は基本的に全角取りとなり、ぶら下げありの場合は、さらに句読点（と閉じ括弧）のぶら下げも行われます。行末の句読点は、まれに半角取りになる場合もあります

２）追い込み（句読点／括弧詰め）

「文字間隔の調整」が「句読点のみを詰める（K）」に設定されます。行長が足り

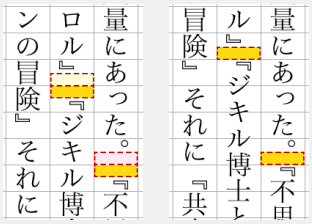
memo

段間を文字サイズの整数倍にしない場合、２段目以降はグリッド線と文字位置が一致しなくなります。

Note■句読点・括弧連続時の詰め

全角の句読点や括弧はデザイン上、前後に半角分のスペースがあり、句読点と起こし括弧、閉じ括弧と起こし括弧が連続すると、下図のa）のように全角分の空きができてしまいます。間延びを防ぐため、通常はその箇所をb）のように半角分（かそれ以上）詰める処理を行います。

Wordの場合、左図の「カーニング」の設定をデフォルト通り「半角英字と区切り文字（P）」にしておけば、自動的にb）のように詰めてくれます。この設定を「半角英字のみ（L）」にすると、a）のように詰め処理は行われません。



a）　b）

Tips 小説本文の設定

Wordで小説を組むなら、文字間0%のベタ組みとした上で、1）の「追い出し」を選ぶのが無難でしょう。

日本語組版では、文字間をベタより広げるのは最終手段で、少し詰めて追い込むのが基本です。ただ、2）の「追い込み」設定ではぶら下げが適切に行われない（次ページのNote参照）という問題もあり、行中の句読点・括弧の前後が最大で半角分、詰まる箇所が出てきます。

句読点の後がそれ位まで詰まると、文章の区切りが見えにくくなります。詰め幅を抑え、余裕を持たせて組むのが基本の小説本文でそこまで詰めるとすれば、やむを得ない場合だけでしょう。例えば、そうしないと1行に収まりそうな段落が2行となり、最終行が「～す。」「～す』」のように、1文字＋句読点・括弧になってしまうようなケースです。

1）の設定では追い出しが基本となりますので、文字間がベタ組みより広がる箇所が増え、上記のように段落最終行が1～2文字となる箇所も増えます。しかし、全体としては、句読点や括弧の前後を変に詰めず、文字間が均一に見える組み方と言えるでしょう。

プロ用DTPソフトのInDesignなら、詰め量の上限を細かく設定するなど、追い込みでもより均一な組み方に調整できるのですが、Wordにそこまでの機能は望めません。

ない場合は、行末の句読点／閉じ括弧の後、行中の句読点の後、起こし括弧の前、閉じ括弧の後を最大 1/2 文字分まで詰めて、文字を追い込みます。行末の句読点／括弧は行長に余裕がある場合は全角取り、ない場合は半角取りになります。ぶら下げありにしても、行中に調整に使える句読点／括弧が全くない場合のみ、句読点（と閉じ括弧）がぶら下げられるため、ほぼぶら下げなしになります。

実際の処理としては、行内に詰められる箇所があれば、それぞれを均等に詰めます。例えば、1 文字多く収める必要があり、行中に句読点・括弧が 2 個あれば 1/2 文字分づつ、3 文字あれば 1/3 文字分づつ詰められます。全てを 1/2 文字分まで詰めても収まらない場合は、追い出されます。

この設定では、1）より文字間が広がる頻度は少なくなりますが、その分、行中で句読点・括弧の前後が詰まる箇所が多くなります。1/2 文字分も詰められると、かなり詰まった印象になり、文章の区切りも見えにくくなります。

3）追い込み（句読点／括弧・かな詰め）

「文字間隔の調整」が「句読点とかなを詰める（U）」に設定されます。この設定では 2）と同じく、禁則処理を追い込みで処理します。

文字間を詰める箇所としては、2）の行末の句読点／括弧の後、行中の句読点の後・起こし括弧の前、閉じ括弧の後に加えて、かな文字の部分が均等に詰められます。但し、括弧・句読点の前後の詰めだけで調整できる場合、かな文字は詰められません。2）と同じく、ぶら下げありに設定しても、行中の句読点／括弧での詰めが優先され、実際にはほとんどぶら下げ処理が行われません。

この設定では、かなが設定した文字間より詰められる場合があります。行末の句読点は、 2）と同じく全角取りまたは半角取りとなります。

a）の設定例では、追い出しにより先頭行の文字間が全体に広くなっています。b）のように行末に読点をぶら下げると、文字間の広がりが解消されます。これらの設定では、行末の句読点／括弧はほとんど全角取りorぶら下げになります。c）の設定例では、円内の句読点の後を詰めて追い込みが行われ、読点までが1行に収まっています。行末の句読点／括弧は、全角取り・半角取りのどちらかになります。

Note■ぶら下げでの問題点

Wordはワープロソフトの中では組版設定・処理が細かく行える方ですが、望ましい形で組まれない場合もあります。その例がぶら下げです。組版ルール上、本来行末にぶら下げていいのは句読点のみです。しかし、Wordでぶら下げをありにすると、a）のように閉じ括弧もぶら下がります。前後の文章を少し直し、行末に来ないようにしてやるしかありません。

また、b）は「句読点のみを詰める」設定でぶら下げありとした例です。例の2行目では、本来まず行末の読点をぶら下げ、行内の句点の後は詰めないようにするのですが、Wordでは何故か行内の詰めの方が優先されてぶら下がらず、句読点の後が大きく詰められてしまいます。こちらも本文を直すしかありません。

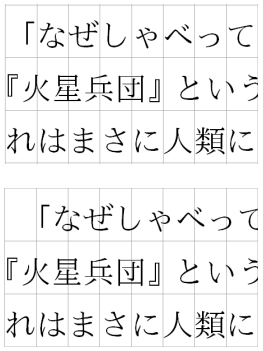
a）　b）

Tips 行頭括弧の位置

段落頭・段落途中の行頭に起こし括弧が来る場合、その位置は下図a）b）のどちらかにするのが一般的です。a）が最も標準的で、横組みではb）もよく見られます。

全角括弧でb）の組み方にするには、次ページの表の「行頭の記号を1/2の幅にする」のオプションをオンにして、段落先頭の起こし括弧前に全角のスペースを入れます。

a）の組み方にするには、上記のオプションをオンにして、段落頭の起こし括弧の前に半角分のインデントorスペースを入れます。また、「行頭の記号を～」のオプションをオフにして、段落途中の行頭に来た起こし括弧のみ、手動でプロポーショナルの和文フォント（p5参照）に変更する、という方法もあります。例えば、本文が「MS明朝」なら「MSP明朝」、「IPAex明朝」なら「IPA P明朝」を指定すればOKです。



●ページ余白

余白を先に決めてしまうと、その中に所定の文字数が収まるよう、文字間が適当に決められてしまい、ベタ組みより文字間が広がることが少なくありません。

本マクロでは行長を正確に設定するため、余白を後から設定します。「本文書式」を全て設定した後、「余白の計算」ボタンを押すと余白が計算されます。一つでも未設定の項目があると、余白の計算は行えません。デフォルトでは上下・内外の余白がそれぞれ均等になるよう計算されますが、上下・内外の余白の配分は「上余白」「外余白」の設定で変更できます。上下・内外の余白の合計量は、どちらも「本文書式」で一義的に決まりますので、例えば「上余白」を増やせば、その分「下余白」が減ります。

memo

いずれかの余白がマイナスまたは5㎜以下の場合は、次のステップに進めないようにしています。

Note■縦組み時の内外余白

Wordは横組みを基準にしているため、縦組みで見開き設定を行うと、ページ設定の「内」余白が外側（小口側）の、「外」余白が綴じ側（ノド側）の余白になり、設定値と実際の余白が逆になってしまいます。

このマクロの設定画面では、組み方向に関係なく、「外余白」が正しくページ外側（小口側）の余白となるようにしています。

2.4　その他の注意事項

●組版マクロによる標準スタイルの変更

組版マクロから直接設定できないページ設定・書式設定も、一部変更されます。対象となる設定内容は、下表の通りです。

本文の書式は、対象文書の「標準」スタイルを変更することで設定しています。フォントの項でも述べた通り、本文の一部の書式を範囲指定して手動で書式を変更してしまうと、その部分のその書式についてはスタイルの変更が適用されず、組版マクロでの設定が反映されなくなってしまいます。

マクロによる書式の設定は、「標準」スタイルを基準とする他のスタイル（「見出し１」など）にも影響する場合があります。例えば、本文を詰め組みとした場合、見出しなど他のスタイルでも、文字間が同じ詰め量に変わる場合があります。

分類	設定項目	設定内容
ページ設定	余白 － 複数ページの印刷設定 － 印刷の形式（M）	見開きページ （余白を左右対称に設定）
	その他 － ヘッダーとフッター － 奇数/偶数ページ別指定（O）	オン （左右対称・別内容の設定が可能）
	その他 － ヘッダーとフッター － 用紙の端からの距離 － ヘッダー（H）／フッター（F）	本文領域の上端／下端に対し、本文の文字サイズ×1.5倍前後離れた位置に来るように設定。
フォント	詳細設定 － 文字幅と間隔 － 倍率（C）	100%
段落－ インデントと行間隔	間隔 － 行間（N）	固定値 （詳細は次項参照）
段落－ 体裁	改行時の処理 － 禁則処理を行う（U） 英単語の途中で改行する（W）	 オン オフ
	文字幅と間隔 － 行頭の記号を1/2の幅にする（C） 日本語と英字の間隔を自動調整する（E） 日本語と数字の間隔を自動調整する（S） 文字配置の配置（A）	 オフ オン オン 自動
	オプション － 禁則文字の設定	標準

※表中の各設定の表記はWord 2016に準じていますが、他のバージョンでもほとんど同じです。

●行間の「固定値」設定について

このマクロでは、段落設定での行間をデフォルト設定の「１行」から「固定値」に変更します。Word で OpenType フォントや一部の TrueType フォントを「１行」設定で使用すると、行間が異常に広がるという現象が出るためです。（これは、フォント内部で行の前後に入るスペース（レディング）が広く取られている場合に、発生します。）「１行」設定には、ルビを振った行の行間が他の行より広がってしまう、という問題もあります。「固定値」設定でルビを振った場合、画面上ではルビが見切れてしまいますが、印刷・出力は正常に行われます。

3　ダーシ（ダッシュ）間隔詰めマクロ　使用方法

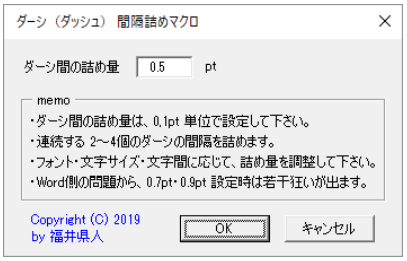
3.1　概要

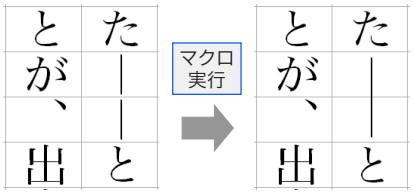
文中で二倍ダーシ（ダッシュ）「——」を使う場合、ベタ組み（文字間ゼロ）にしていても、フォントによってはダーシの間が空いてしまう場合があります。

このマクロは、本文内で使われている連続したダーシの間隔を、指定したポイント数だけ詰めるマクロです。ダーシを連続した線にすることができ、詰めた分だけ連続ダーシの前後を空けて、全体の文字送りが狂わないように調整します。

3.2　使用方法及び注意事項

マクロを実行すると、下のようにダーシ間の詰め量を指定するダイアログが出ますので、詰め量をポイント数で入力して下さい。詰め量は 0.1pt 単位で入力して下さい。





上の例では、「ヒラギノ明朝W3」（文字サイズ 9.0pt）のダーシ間を0.5pt詰めています。

「OK」で先に進むと、本文領域にある連続ダーシの間が設定量だけ詰められます。同時に詰め量の半分だけ連続ダーシの前後を空け、他の文字の位置が変わらないようにしています。現実には二倍ダーシ以外が使われることはあまりないと思われますが、一応 2 ～ 4 個の連続したダーシは全て処理の対象としています。

ダーシ間の空きがちょうどゼロになるよう、使用フォント・文字サイズ・文字間設定に合わせて、詰め量を調整して下さい。詰め過ぎると、二倍ダーシ全体が短くなってしまいます。ダーシ間の詰めを解除したい場合は、詰め量を「0pt」に設定してマクロを再実行して下さい。

memo

Word の文字間設定は最小0.05pt 単位であるため、詰め量が0.05pt 単位ではダーシ前後の空き量がその1/2の0.025pt 単位となり、実際の空き量は0.05 pt 以下の分が切り捨てられた値になります。

memo

ダーシ間の詰め量を0.7/0.9pt に設定すると、何故かWord 内ではそれぞれ0.65/0.85pt として扱われ、詰め量と文字送り量に若干誤差が出ます。
例えば、0.7pt に設定すると、実際の詰め量は0.65pt となります。ダーシ前後のアキ量は0.35pt となるべきところが、0.65/2=0.325pt と計算され、さらにここから0.05pt 以下の分が切り捨てられて、0.3pt に設定されます。

memo

4 個以上の連続ダーシがある場合、例えば 6 個であればマクロ実行後は 4 個 ＋ 2 個の、7個であれば4個＋3個の、8個であれば4個＋4個の連続ダーシとなります。

4　著作権・免責事項・サポート etc.

●著作権

本マクロはフリーウェアです。転載自由ですが、メールにて転載先の連絡をいただけると幸いです。連絡は事後でも結構です。なお、配布されるアーカイブに含まれる全てのファイルの著作権は、作者である福井県人に帰属します。ファイル内容を改変しての再配布は、禁止致します。

●免責事項

本マクロの使用によりいかなる損害が生じても、作者は一切の責任を負いません。使用者の自己責任において本マクロを使用し、実行結果をよく確認して下さい。また、本マクロは個人利用を前提に設計しており、業務用途に耐え得る組版を行うものではありません。

●サポート

ご要望や不具合のご指摘等がございましたら、メール（FTA69092@biglobe.ne.jp）または twitter（@fukui_kenjin）でご連絡いただけますと、幸いです。

※本マニュアルでは、組版例のテキストとして海野十三『火星兵団』、及び畑仲哲雄『スレイヴ－パソコン音痴のカメイ課長が電脳作家になる物語』を、引用させていただきました。